

長野県立歴史館たより

2022年 夏号 vol.111

山 伏

特集

佐久の修験

大井法華堂の世界





常設展示紹介

原始 最初に住んだ人々

「最初に住んだ人びと」のコーナーでは、佐久市香坂山遺跡から1997年に出土した旧石器時代（約37,000年前^{（註）}）の石器群と、信濃町貫ノ木遺跡から出土したそれ以降のナイフ形石器などの資料を新たに追加しました。香坂山遺跡では飯田市竹佐中原遺跡ではみられなかった縦長の剝片（石刃）とそれを剝ぎ取った石核が出土していて注目されます。石核や石刃の材料であるガラス質黒色安山岩は、遺跡の北方数百mの八風山で産出し、2kmほど西の下茂内遺跡はこの石材を用いた19,000～16,000年前の槍先形尖頭器の工房として知られています。さらに信州ブランドともいわれる黒曜石や、ナイフ形石器などの素材となった珪質頁岩も既に登場していました。その後の時代でも使われる様々な石材の存在は、遺跡を残^{（注）} 其の後の奈良文化財研究所の学術調査による。

した人びとの先見性と幅広い遊動生活の軌跡を物語っているようです。

この他「寒冷化する環境の中で」では、新たに縄文時代晩期のコーナーを設営し、山ノ内町から借用した晩期前半の佐野式土器や遮光器土偶なども展示しました。（水沢教子）



佐久市香坂山遺跡出土石器（当館蔵）

古代・中世 木曾義仲合戦図屏風

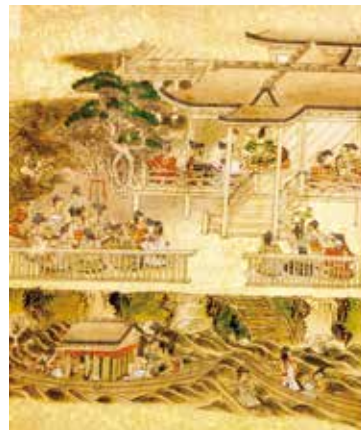
木曾義仲が入京するまでの活躍を、『平家物語』を題材にして描いた四曲一双の小屏風です。もともとは各場面をめぐって鑑賞する画帖（絵をまとめた折本）に仕立ててあったものですが、12枚の絵を屏風に貼りなおしたことになります。木曾義仲は平安時代末期の信濃と関わりの深い武将のひとりですが、その勇姿を描いた資料は少なく、貴重な屏風の一つです。「横田河原合戦」や「竹生島詣」等が描かれているのが特徴です。

義仲が戦死する最期の場面までではなく、入京するまでの場面を使って屏風を仕立てたということは、朝廷に見放され、同じ源氏に討たれた非業の武将としてではな

く、源氏として武勲を立て、地位を高めていく英雄としての姿を前面に出し、義仲に向けられた負のイメージを払拭するための手法であったのかもしれない。8月から展示予定です。（宮坂到・柴田洋孝）



横田河原合戦



竹生島詣

木曾義仲合戦図屏風（当館蔵）

近世

善光寺の由来～善光寺如来東漸録

信州を代表する古刹といえば善光寺です。善光寺の創建には諸説あり、発掘調査によって7世紀後半から末ごろの屋根瓦が出土していることから、この頃には何らかの瓦葺の建物があったと考えられています。しかし、それが今につながる善光寺であったかは定かではありません。

善光寺の由来を記した縁起はいくつかあり、そのうちの一つが「善光寺如来東漸録」です。全部で5巻あり、1～3巻までは善光寺如来（阿弥陀如来）が出現した毘舍利国^{ビシャリ}での話、4・5巻は日本国内での善光寺如来の話です。物部氏と蘇我氏の対立によって難波の堀江に投げ込まれた善光寺如来は、難波の堀江を通った本田善光に飛び乗って信濃にやってきます。最初に安置されたのが現在の飯田市で、そのあと善光寺如来のお告げによって長野市に遷された、というのが大まかな説話の内容です。飯田市に元善光寺、長野市に

善光寺があるのは、このような理由からです。

今年は新型コロナウイルスの影響で開催が1年延期となった御開帳が、4月3日から6月23日まで行われています。「遠くとも一度は詣れ善光寺」、「一度詣れよ元善光寺。善光寺だけでは片詣り」。御開帳に限らず、ぜひ長野においでの際はご参りください。（柴田洋孝）



善光寺如来東漸録（当館蔵）

近現代

大正時代の扇風機



常設展示室近現代コーナーで、令和3年度新収蔵品の扇風機を展示しています。扇風機は19世紀後半、アメリカで初めて発売されました。日本では江戸時代に複数の団扇を軸に取り付けて、手で回すものが使用されていましたが、明治27(1894)年には国産の電気扇風機が発売されました。アメリカでは天井扇が主流でしたが、日本では卓上式がほとんどだったようです。大正時代になると、大手電機メーカーを中心に大量生産されるようになり、高価で手にできなかった一般市民も入手できるようになりました。

展示している当館所蔵の扇風機は、大正時代

末期に製造された三菱電機製のものです。スタンドと本体は鋳鉄製^{ちゅうてつ}で非常に重厚な造りで、「黒色、4枚羽根、首振り機能、密なガード」という、当時の扇風機の4要素がよくわかる資料となっています。風力も3段階で調節可能となっており、約100年前のものですが、現在使用されている機能がすでに搭載されていました。

戦時中、家庭向け扇風機は製造中止となっていましたが、戦後に製造が再開され、デザインや機能において様々な工夫がなされ今日に至っています。エアコンの普及で一時は生産が減少しましたが、節電や省エネルギーなどの観点から扇風機の良さが再評価されてきています。

近現代「長野県の高度経済成長」のコーナーでは、本機をはじめ、蓄音機や真空管式ラジオ、ゼンマイ式掛け時計など、メンテナンスと修理を行い、保存と動態展示に努めています。（内城正登）



はじめに



引導する山伏（「熊野那智参詣図曼荼羅」高圓寺蔵）

「山伏^{やまぶし}」とは、山岳で修行することによって超自然的な力を体得し、その力を用いて呪術的な活動をおこなう宗教者のことです。「山に伏して修行する」ことからこの名前がつけられているように、山岳信仰と一体となったものです。この修行によって不思議な法力^{げん}（験）を得ることから「修験^{しゅげん}」とも呼ばれます。信州には霊山として畏れられた険しい山岳が多く、山伏も多く活動していました。

大井法華堂（佐久市岩村田）に伝えられた文書のうち800点余りは佐久市指定文化財に指定されています。また本尊などの仏具類もこれまで外に出ることはありませんでした。今回の企画展はそのほとんどが初公開のものばかりといえます。



はじめは「一遍上人」との出会い

木曾義仲の滅亡後、佐久大井荘へ入ったのは甲斐源氏小笠原氏で、大井氏を名乗ります。大井太郎光長^{みつなが}は將軍に近侍する、まさに「御家人^{きんじ}」でした。

弘安2年、光長は善光寺式阿弥陀如来三尊像を建立し落合新善光寺の本尊として寄進したといいます。一遍は光長と姉のいる館を訪れ、踊念仏をおこないます。姉は随喜^{ずいき}し極楽往生^{ごくらくおうじょう}を遂げます。

善光寺の二河白道図^{にがびやくどう}に感得したという一遍と阿

弥陀如来信仰は切り離せません。また、一遍はその後熊野本宮で阿弥陀如来の仮の姿である熊野権現から夢告^{ほんぐう}をうけており、熊野信仰も一遍の思想の根幹となります。そして光長の末子源覚^{げんかく}は熊野信仰に帰依し草堂を建立しました。これが修験道大井法華堂の始まりです。初代一遍と2世他阿の行状を描く「遊行上人絵巻^{ゆぎょうしやうにん}」には、大井館と考える踊念仏の場面が描かれています。太郎と思われる武士の右端には一族の修験者の姿も描かれています。これが源覚の可能性にあります。



役行者とは

修験道の開祖は役行者^{えんのぎやうしや}（634～701）です。後世きわめて超人的な法力を強調した説話が語られますが、実在した人物と考えられています。

役行者の霊験譚^{れいげんたん}を記した書物には、浅間山の記事も記されています。役行者は修行した吉野山から大峯（奈良県）に石橋を架けるため、全国の霊山にいる天狗に命じて、鬼を駆り立てました。信濃では浅間山、御嶽山、戸隠山がこれにあたりま



大井法華堂役行者倚像（当館蔵）

す。浅間山が修験の修行場であると認識されていたのです。室町時代なかごろには、浅間山を仰ぎ見るのできる場所に多くの修験や信者がいたことがうかがえます。

信者は熊野などの修行地へ訪れるため、特定の修験者と契約します。修験者は「先達」となり、信者を「檀那」として権利化しその拡大を図りました。大井法華堂は次第に佐久・小県地域の修験者の権利を集積し、末端の山伏を「同行」として支配し、この地域の山伏の頭となりました。

聖護院門跡

天台宗聖護院門跡は熊野三山（本宮・那智・新宮）を治める中心となると、全国の修験者を組織化し、修験道本山派を確立しました。門主の入峯（熊野・大峯などへの修行登山）には全国の同行に協力させるため、法華堂などの有力山伏を先達に補任しました。役銭などを徴収して上納するシステムが確立していきます。

大井氏の勢威



結城合戦絵詞（部分 重要文化財 国立歴史民俗博物館蔵）

大井法華堂が地域のなかで勢力を拡大した理由は、その外護者である大井氏の力によることはいうまでもありません。とくに15世紀には、大井氏は鎌倉府鎌倉公方と結びつきました。大井持光は公方足利持氏の子の乳母父となったとされます。永享の乱で持氏が死んだ際には遺児万寿王を佐久に匿いました。結城合戦で兄春王・安王が殺されたため、万寿王が鎌倉に帰還し公方足利成氏となりました。法華堂文書には、大井氏が関東に所領を有していた由緒を記す書付が残されています。



神馬奉納額（佐竹永海筆 当館蔵）

戦国～江戸時代の大井法華堂

戦国時代には武田信玄が佐久地域を支配し、国人大井氏は衰退しました。山伏たちも武田家のもとに再編成されました。山伏は特定の陣営に属さないため客僧と呼ばれています。戦国大名は、客僧に書状をもたせ、相手側陣営との交渉に活用していきます。また戦時には信玄の勝利のために祈祷するように命じられています。

江戸時代になると大井法華堂は佐久郡年行事職に補任され、聖護院門跡の院家勝仙院の支配をうけました。歴代当主はたびたび大峯や熊野に入峯して加持祈祷をおこないました。当時の日記は修行関係の記録としてたいへん貴重です。珍しい東照宮や護摩堂厨子など、興味深い仏具類もぜひご鑑賞ください。

おわりに

修験道は明治6年に廃止されました。大井法華堂の文書や仏具類は、近代以降も大井家や地域の皆さんにより大切に守られてきました。

厳しい自然環境に立ち向かうのではなく、それを受容し共生していこう

とする修験道の考え方は現代社会の中ではむしろ見直されているのではないのでしょうか。この企画展で皆さんにも考えていただければ幸いです。

（村石正行）



大井法華堂東照宮額（当館蔵）

希少な遺物

2022年3月～6月の「至宝の名品—学芸員のイチオシ 考古資料編—」に出品した、指輪形石製品、黒曜石製なつめだま、丸木舟、漆塗りたてぐし、六角宝幢などは、それぞれの時代で県内唯一もしくは数点しか出土していない希少品です。ただし現存する点数が少ないからと言って、当時から珍しいものであったのかどうかは分かりません。例えば、弥生時代の指輪形石製品は、全国的にも出土は多くありませんが、弥生時代に指輪が希少であったかは別問題です。指輪には骨角製や金属製のものもあり、腐食等で消失して現在に残されなかったものもあり、指輪が当時から希少であったかどうかは分からないからです。また、木製の丸木舟、漆塗り、六角宝幢は、腐食したり燃やされたりして、現在に伝わっていないだけかもしれません。また、小さなものであれば、発掘調査で見逃されてしまう場合もあるでしょう。もちろん、当時から希少であったものもあるので、まず希少の意味を考証する必要があります。歴史学ではこれを「史料批判」と呼んでいます。

特殊な形の土器

写真は、長野市えのきだ榎田遺跡から出土した弥生時代後期と古墳時代初頭の竪穴住居跡（SB1802：弥生時代後期、SB124：古墳時代初頭頃）から出土した特殊な形の土器です。弥生時代後期の土器は形や文様が地域ごとに統一されており、千曲川流域の善光寺平から佐久平では一定の「きまり」によって土器がつくられています。その「きまり」にそぐわない土器があれば、他地域のものか、何か特別な意味があって作られたと考えられます。古墳時代になると土器作りの「きまり」の内容が変わっていきませんが、やはり地域ごとに同じ土器のセットがつくられる点は変わりません。写真の土器はその「きまり」にそぐわない土器で、他の地域でも見られない特徴を持った土器ですので、何か特別な意味があって作られたものと思われます。赤く塗られた2点の土器は、縦に4本の凸帯が貼り付けられており、その下端部は脚とな

っており、土器底が少し浮いています。同じ「きまり」で作られた土器と考えられます。どんな目的で作られたのかは分かりません。

2点の土器は欠けた部分を復元していますが、A（SB124）は2割、B（SB1802）は8割が残存しています。4本の縦の凸帯と脚があるという同じ特徴を持った土器ですが、異なった点も見られます。Aは内外面が赤彩され、凸帯にはキザミが見られます。Bは外面のみが赤彩され、内湾した口縁には2個一対の孔が2か所あります。2点の土器が出土した竪穴住居跡には少し年代差がありますが、2点の土器は同じ時期のものである可能性があります。年代が新しい竪穴住居跡から出土したAはバラバラの破片の状態出土したことから、竪穴住居跡が埋まる際に土と一緒に紛れ込んだと考えられます。また、2つの竪穴住居跡は10mほどの距離にあり、これらの土器は弥生時代後期の同じ時期に一緒に使われていた可能性があるのです。

他に類例がない凸帯と脚が付いた弥生時代後期の土器は何に使われたのでしょうか。赤彩されているので、煮炊き用ではないことは確かですが、謎です。弥生時代の土器としては特異な特徴があることから、模倣品である可能性が高いと考えています。脚が付く器は、木製品か青銅器を思い浮かべますが、オリジナルと思われるものが今のところ見当たりません。希少な遺物は、希少であるが故に比較検討ができず研究が難しいのです。どのような経緯でこのような特殊な形の土器ができたのか明らかにできれば、「至宝の名品」となるかもしれません。想像を膨らませながら、もう少し研究を続けたい遺物です。（鶴田典昭）



弥生時代後期の土器（榎田遺跡出土 当館蔵）

長野県立歴史館 文献史料課のお仕事 その2

古文書班 古文書の整理と公開



当館は鳥羽院(平安時代)の下文(重要文化財)や足利尊氏(鎌倉・室町時代)の書状、武田信玄(晴信)の感状(戦国時代)、徳川家康の書状といった古文書を所蔵しています※

※常設展示や閲覧対応はしていません



いづれも長野県内(信濃)の僧侶や武士、豪族に対して送ったものです

このような有名な武将のものはもちろん貴重です

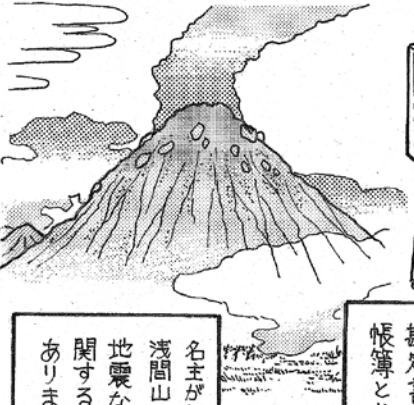
でもね



農村や町に住む人々の暮らしがわかる『地方文書』といった古文書もとても大切なんです

それってどんなものがあるの？

藩の通達や人々の願書、訴状、祭祀、普請、婚姻、金の貸借に関する書付等が多いのですが



その中には問屋を移めた家に残っていた荷物の内容や勘定書などの帳簿とか

名主が記録した浅間山の噴火・洪水・地震など自然に関するものもありますよ



藩の通達や人々の願書、訴状、祭祀、普請、婚姻、金の貸借に関する書付等が多いのですが

昔のようすがわかるってこと？



31万…スゴいね

数十年かかってるってことでしょ

こうした公開業務の下支えをしてくださっているのは古文書愛好会や整理ボランティアの皆様です

感謝



古文書愛好会には草書体(くさし)や変体仮名など古文書を一次解読してもらい粗目録を作っています

また整理ボランティアの皆さんには史料データの入力、ラベル貼付といったお手伝いをお願いしています



31万…スゴいね

年間では1万点以上の目録(データベース)づくりを行い

現在では31万7千点以上を公開しているんですよ

当館の古文書班の職員3名は長野県関係の地方文書などの古文書を解読し整理して閲覧(公開)できるようにしています

当館閲覧室の目録やホームページから、自分の見たい古文書を探し閲覧申請をすれば本物に触れることができますよ

ホームページも見てね

※2022年3月現在

INFORMATION

インフォメーション

■2022(令和4)年 6月～9月の行事予定

6月

休館日
6・13
20・27

所蔵品展

2022年所蔵品展
至宝の名品

—学芸員のイチオシ
考古資料編—

3月19日(土)～6月12日(日)

講座・イベント

古文書講座

初級 A 第1回 6月5日(日)
B 第1回 6月9日(木)
中級 A 第1回 6月4日(土)
B 第1回 6月9日(木)
上級 第2回 6月25日(土)

長野県立歴史館の信州学講座

第2回 6月4日(土) 13:30～15:10
「[玄]の長沼城を掘る」
講師：柳澤亮氏 長野県埋蔵文化財センター

考古学講座

第2回 6月18日(土) 13:30～15:00
「地表下4mの縄文時代のムラを探る」

7月

休館日
4・11
19・25

夏季企画展

山 伏
—佐久の修験
大井法華堂の世界—

7月9日(土)～8月21日(日)

■講演会

7月16日(土) 13:30～
「江戸幕府の宗教政策と修験道」

講師：高埜利彦氏
(学習院大学名誉教授)

8月20日(土) 13:30～
「天台宗寺門派聖護院門跡と
山伏の組織」

講師：徳永誓子氏
(岡山大学大学院准教授)

※講演会は事前申込制 定員80名

古文書講座

初級 A 第2回 7月3日(日)
B 第2回 7月14日(木)
中級 A 第2回 7月2日(土)
B 第2回 7月14日(木)
上級 第3回 7月23日(土)

長野県立歴史館の信州学講座

第3回 7月2日(土) 13:30～15:10
「古代信濃の仏教信仰」
講師：柴田洋孝 長野県立歴史館

8月

休館日
1・8
12・15
22・29

イベント「歴史館で夏休み」

8月11日(木)

古文書講座

初級 A 第3回 8月7日(日)
B 第3回 8月4日(木)
中級 A 第3回 8月6日(土)
B 第3回 8月4日(木)
上級 第4回 8月27日(土)

考古学講座

第3回 8月13日(土) 13:30～15:00
「県内最大の弥生時代のムラを探る」

9月

休館日
5・15
20・26

※9月5日(月)～9月15日(木)は
全館くん蒸のため休館となります。

古文書講座

初級 A 第4回 9月4日(日)
B 第4回 9月22日(木)
中級 A 第4回 9月3日(土)
B 第4回 9月22日(木)
上級 第5回 9月24日(土)

考古学講座

第4回 9月24日(土) 13:30～15:00
「古墳時代の祈りを探る」

信州学出前講座in諏訪

9月17日(土) 13:30～15:10

秋季企画展

諏訪と武田氏

10月8日(土)～11月20日(日)

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、講座・イベント等につきましては、状況により急遽中止とさせていただきますことをご案内いたします。

表紙写真の解説

熊野那智参詣曼荼羅図(17世紀 高圓寺蔵)

熊野三山のひとつ那智宮の社景を中心に、参詣者や縁起に登場する人物を順序だてて描いた典型的な参詣曼荼羅です。実際に熊野比丘尼が本図をもとに地域の人びとに絵解きをおこない、熊野信仰を広めたものと考えられます。画面下には入母屋造の補陀落渡海船とそれを見送る山伏や僧侶の姿が見えます。

行事アルバム

**** 歴史館でこどもの日 ****



5月5日(木・祝)は歴史館でこどもの日と題し、プラ板づくりやクイズを行いました。200名を超えるお子さん、保護者の方々に参加していただき館内が賑わいました。記念品として新デザインの缶バッジとオリジナルしおりを配布しました。プラ板やバッジ、しおりに描かれた土器や土偶の仲間を見に、また来館して下さると嬉しいですよ。

**** 至宝の名品 考古資料 ****



3月19日(土)から2022年所蔵品展「至宝の名品—学芸員のイチオシ 考古資料編—」～大地からのメッセージ～を開催しています。13年ぶりに展示した弥生時代の丸木舟の大きさや、陣馬塚古墳の直刀の半球形飾り金具や銀象嵌された鐘などに関心をもたれていました。

古文書入門Web講座開設

当館HPに古文書入門Web講座ページを新設しました。これから古文書の学習をはじめという初心者の方におすすめです。ぜひ、ご視聴ください。



長野県立歴史館たより 夏号 vol.111

2022(令和4)年5月31日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: https://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業株式会社